

プロテスタント宗教改革とカトリック宗教改革が フリウリ語の歴史に与えた影響について

山本 真司

はじめに

1. フリウリとフリウリ語と宗教改革
2. 聖書翻訳
3. カテキスム
4. 説教
5. 無関心あるいは証拠の不在?
6. フリウリの混沌とした宗教的状况
7. 言語観についての発言

最後に

はじめに

本稿では、イタリア北東部フリウリ地方の言語史に関する問題を取り上げる。フリウリ地方は、地理的観点から言うと、おおむね、現在のイタリア共和国フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア自治州の地域からトリエステ県域を除いたものに対応する¹⁾。同州は、アドリア海北岸地域にあって海に面し、スロヴェニアと境を接している（なお、東部の国境をまたいで広がるゴリツィア Gorizia 地方²⁾は、フリウリとスロヴェニアの両方の文化的影響が並存・混在する地域である）。

フリウリでは複数の言語³⁾が行われるが、住民の半分以上はこの地方特有のロマンス語であるフリウリ語を話す⁴⁾。したがって、文化的な意味でのフリウリは、しばしば、フリウリ語地域とほぼ同義とされる。本稿で主に取り上げる言語も、このフリウリ語である。分布面積・話者人口の点でどちらかと言えば小規模な言語共同体として、隣接する、強力な政治勢力の言語であるイタリア語およびヴェネト方言の圧力を強く受けながら存在してきた。

フリウリは、かつてはプロテスタントの宗教改革の波に激しく洗われた地域であり、その後カトリック教会が圧倒的な優勢を取り戻したという経緯をたどっている。ならば、そのようなプロテスタントの宗教改革やそれに続くカトリックの宗教改革⁵⁾の動きは、フリウリ語の発展にどのような影響を残しているのだろうか。

この問いに答えるため、フリウリにおけるプロテスタントの宗教改革とそれに続くカトリックの宗教改革がフリウリ語に与えた影響の跡を、フリウリ史の研究者たちのさまざまな著作に拠ってたどってみたい。フリウリを固有の言語文化を持つ1つの共同体として扱うことがごく普通のこととなり、また、フリウリの宗教改革の歴史研究が深まりつつあるにもかかわらず、「プロテスタントの宗教改革は、(イタリア一般に、ということではなくて) フリウリ語の歴史にどのような影響を与えたであろうか」という問いは、フリウリ史の研究者の間ではあまり行われていないように見える。あるいは、その答え自体が、あまりにも見え透いていて面白くない、と思われているのかも知れない⁶⁾。しかし、本稿では、あえてそのような問いに取り組んでみようと思う。

プロテスタントの宗教改革が1つの言語共同体のあり方に大きな影響を及ぼした例として、我々が比較的良く知っているのは、例えば、ドイツ語や英語などの聖書翻訳であろうか。フリウリの場合は、それらとは状況がかなり異なっていることを示したいと思っている。加えて、比較・参考のため役に立つと思われる際には、フリウリと隣りあっているスロヴェニア⁷⁾の状況を参照する(ただし、紙面の都合上、組織的な比較対照ということではなく、多分に、エピソード的な参照と言うことになるであろう)。スロヴェニアも、プロテスタントの宗教改革が盛んだったが、その後カトリックが再び優勢となった所である。フリウリとスロヴェニアは、また、隣人同士影響を及ぼしあった間柄であるのみならず、強力な上層・傍層言語の圧力にさらされつつ、自己を確立していかなければならなかった、比較的小規模な言語共同体であるという点でも似た状況にあり、また、それにもかかわらず、さまざまな点で異なっていることが、対照的で興味深いと思われるからである。

1. フリウリとフリウリ語と宗教改革

イタリアにおいて、カトリック教会からの離反者に対して光が当てられたのは、比較的最近のことであり、(イタリアでは長いことローマ・カトリック以外の宗派が公認されなかったという事情と関係して)、それまではそれら離反者の思想や活動に積極的な意義が与えられてこなかったと言われている⁸⁾。

近年の諸研究によって、宗教改革期のフリウリの状況も、次第にわかってきている。それによると、フリウリでも、プロテスタントの宗教改革の運動は、都市部を中心として隆盛を極めていたこと、それらの潮流は、ヴェネツィアなどイタリア側からのみならず、ドイツ語圏やスロヴェニアからも来ていること⁹⁾、また、ルター派あるいはカルヴィン派というような特定の教派がフリウリ全体で優勢になったのではなく、町ごと、あるいは地区ごとに、異なったグループが優勢であったこと、などが指摘されている¹⁰⁾。

これだけのことがわかっていながら、フリウリにおけるプロテスタントの宗教改革が言語について(特にフリウリ語について)どのような態度を取っていたかという問題になると語ることは容易ではない。いくつかの代表的なフリウリ史・フリウリ言語史の著作を見ても、プロテスタントの宗教改革とフ

フリウリ語の関係について直接触れている記述は、見つけるのが困難である。したがって、次に見るように、普通、プロテスタントの宗教改革の重要な道具と見られている諸制度についても、フリウリの歴史は空白なままなのである。

2. 聖書翻訳

スロヴェニア語は、聖書翻訳およびプロテスタントの宗教改革関係の文書によって、民族の歴史上初めて、本格的である程度安定した書き言葉の伝統を持つに至ったことが知られている。その最大の功労者は、ルーテル教会に帰属したトゥルーバル Primož TRUBAR (1508 - 1586) である¹¹⁾。そのような言語的伝統の誕生は、他とは異なった独特の言語を持つスロヴェニア人という民族の意識の形成と、さまざまな方言集団に分かれていたスロヴェニア人全体を1つにまとめる標準語の誕生という点で、貢献したと言われている。

スロヴェニアは、その後、カトリックの宗教改革に伴って、大部分が再びカトリック教会の元に置かれるが、プロテスタントの宗教改革によって誕生したスロヴェニア語文語の伝統は、一部のプロテスタントのマイノリティによって継続されたほか (デラコルダ(2008))、カトリックも部分的にそのような文語を利用し続けたので、その影響は続くことになる。ただし、現在のスロヴェニア語標準語は、その後のさまざまな言語改革 (綴り字の改変、語彙の変革、そして教会スラヴ語風の語尾の導入など¹²⁾) を経たものなので、当時のスロヴェニア語からは幾分隔たっている。

それに対して、フリウリでは、プロテスタントの宗教改革者によって行われた聖書のフリウリ語への翻訳というのは今のところ知られていないようである。まったく行われなかったのかもしれないし、カトリック宗教改革に伴って廃棄されてしまって残らなかったと言うことかもしれない。この点についてはまた後ほど詳しく取り上げることにしよう。

ただ、確かなことは、イタリアのプロテスタント諸教会では、地方を問わず、イタリア語の使用が早くから普及したことである。現在、フリウリでも、プロテスタントの聖書はイタリア語のものが使われている。

断片的なテキストを除けば¹³⁾、フリウリ語への聖書翻訳 (部分訳) は、カトリックの枠内で¹⁴⁾、ずっと遅くなって、19 世紀に現れる。本格的なフリウリ語訳聖書は、典礼式文や聖書にラテン語だけではなく国語をも使うことを積極的に許可する方針を打ち出した第二ヴァティカン公会議 (1962-1965) の動きを受けてはじまったもので、プロテスタントの宗教改革やそれに続くカトリックの宗教改革の時代の動きとは、直接のつながりはない。最初にはフリウリ語の伝統に関心を持つ一部の知識人や聖職者の試みとして始まったが、次第に教会当局の許可・バックアップを受けて推進される事業となっていった。現在では、教会の正式な認可を受けた、旧新約聖書全巻のフリウリ語訳が存在している¹⁵⁾。

3. カテキスム

宗教改革の産物で、ある意味では聖書の翻訳以上にキリスト教の歴史に大きな影響を与えたのが、実は、カテキスム *catechismus* である。この言葉は、もとは、広く教理教育そのものを意味するが、狭義では、簡単に言うと、一問一答の形式で教授する教理教育のメソッド、あるいは、そのようなメソッドに利用するための質問集（多くの場合、小冊子の形にまとめてある）のことである。以下では、教育メソッドのこともそのメソッドのために用いられる小冊子のことも、両方、「カテキスム」と呼ぶことにする¹⁶⁾。

このような一問一答形式のカテキスムの小冊子は、マルチン・ルターの案出したものが最初と言われる（「小教理問答」）。聖書の翻訳にくらべて、カテキスムは、比較的目立たない存在であるように見える。そして、もっぱら「信条」や「信仰告白」あるいは「教理」の提示の問題として注目されることが多いようである。しかし、本稿では、それを言語的な影響の問題として取り上げたい。ルターがカテキスムを考案したのも、その大衆教育の手段としての有効性・重要性を認識していたからに他ならない。ならば、宗教改革の理念から言っても教育の有効性の点から言っても、それが人々の自然に理解できる言語で編集されるのは自然の成り行きであるが、そこにはあるべき言語の姿と言うものに関する編者の思想・理解が現れてくる。さらに、そのようなテキストが、多くの人々の用に供されると言うことは、その言語的影響が、社会に広く及ぶことを意味するであろう。

スロヴェニアにおけるプロテスタントの宗教改革においては、トゥルーバルは、聖書翻訳に先立ち、カテキスムをスロヴェニア語で作成している。これは、スロヴェニア語による最初の印刷物ということで、聖書翻訳などと並んで彼の重要な著作の一つに挙げられるのが通例となっている。では、フリウリおよびフリウリ語にについてはどうか。

プロテスタントによるフリウリ語のカテキスムが存在するのではないか、という話が研究者の間で出たことは何度かある（例えば Moretti (1985), p. 51）。筆者も、一度、探索を試みたことがあるが、これと言った成果を得ることはできなかった。結局、筆者の知る限りでは、プロテスタントによるフリウリ語のカテキスム用の小冊子は現存していないし、かつて存在したという確実な証拠もない。

実は、ルターの案出したような小冊子のカテキスムのアイディアは、カトリック教会でも取り入れられて非常に広範囲に用いられ、（カトリック教会においては聖書の読書が信徒の間にあまり広まらなかったこともあって）信徒の教理教育において中心的な役割を果たすに至り、これは 20 世紀にまで至る¹⁷⁾。こうして、プロテスタントから生まれたカテキスムは皮肉にもカトリック教会で非常に効果的に用いられることとなり、カトリックは「カテキスムの教会」とでもいうべき状況になる。

さて、公共の義務教育制度がまだ確立していなかった時代にあつては、自ら学資を払って学校に通うことができない貧しい社会層（伝統的な農村社会では構成員の大部分）にとつては、しばしば、教会の行なう教理教育が、唯一の組織的な「学校教育」であった。複数の政治的単位に分断されたイタリア

にあつては、全土を覆う唯一の統一的な組織は、教会であつたので、教会を通して授けられる教育は、イタリア全土にわたる意味での文化的統一性を確立することに貢献した。その貢献の一つが、実は、イタリア語の普及であつた。Bianconi (1995) は、カトリックの宗教改革における重要人物の一つ、ボッロメオ枢機卿 Carlo BORROMEO (1538 - 1584) の指導下にあつたミラノ大司教区およびロンバルディアにおいて、まさにそのような形で、教会がイタリア語の普及に貢献した様子を論じている。

ところが、フリウリにおいては、カテキスムは、多くの場合、フリウリ語で行われた、ということが知られている。これは、単に、教理教育の教授者が、生徒に対してフリウリ語で受け答えを行なうと言ふだけのことではない。カテキスムのための小冊子が、フリウリ語で編纂され、広まっていたのである。このようなフリウリ語版カテキスムの普及の様子は、現在残っているカテキスム用小冊子をリストアップしている Nazzi (1977) や書記法の変遷の研究の一環としてカテキスムの言語の特徴について考察している Moretti (1985) などの研究で光を当てられ、広く知られるようになった。

フリウリ語の発展の上で重要なのは、こうして行われたフリウリ語でのカテキスムは、教理教育としてのほか、フリウリ語の書記法を確立し、フリウリ語で読み書きするという習慣を広めることに役立った、ということである (Moretti (1985), p. 49)。フリウリでは、19 世紀に、アルマナックなどによるコルポルタージュの文学¹⁸⁾ が繁栄するに至るが、その背後にあつたのは、こうして確立された書き言葉の知識であつた。著者は、自分の言語を書き記すのにゼロから出発して試行錯誤するという苦勞を強いられることなく、既に存在しある程度確立されていた書記法と前例に依拠することができたのであり (これがいわゆる標準語の誕生・確立へと繋がっていく)、また、フリウリ語で読むということに既に慣れている人々を読者層として期待する事ができたのである。

4. 説教

宗教改革の重要な道具の 1 つとして、説教のことに触れないわけには行かないであろう。もともと、説教自体は、もともと古くから教会に存在するものであるが、中世後半から、説教修道会やフランシスコ会の説教者たちの説教活動の例のように、教会内で目覚ましい役割を担うようになってきていた¹⁹⁾。プロテスタントの教会においては、儀礼の多くを簡素化し、また、神の言葉を人びとに宣べ伝える使命の担い手を自認したことから、説教の重要性がさらに増したことは当然であり、その状況は、フリウリのプロテスタントの間でも異ならなかつたであろう。

では、プロテスタントの宗教改革において、説教は何語で行なわれたか、ということになると、残念ながらこの点に関しても、フリウリ語が使われたということを積極的に証言する資料は見あたらない。ちなみに、スロヴェニアのトゥルーバルも、スロヴェニアからフリウリに至るまでの長距離の宣教旅行を行ない、説教をして回つたことが知られているが、記録によれば、彼は、説教にスロヴェニア語、ドイツ語、イタリア語、を用いたとある。

カトリック教会でも、ミサなど典礼の大部分がラテン語で行われる中で、説教は、会衆の理解できる言語で行なわれる部分であるため、その重要性は非常に高かった。そして、カトリックの宗教改革を経て、1700年代になると、フリウリ語でなされた説教を書き留めた記録が多く見つかるようになる（そのような記録はかなりの数 — まだ網羅的な調査はなされていないようだが — 残っており、ペレグリーニ Rienzo PELLEGRINI のフリウリ文学史 (Pellegrini (1987)) などは、これにわざわざ一章をあてているほどである）。ここでも、カトリック教会が信者の教化のためにフリウリ語を積極的に利用したさまが伺える。

フリウリ(語)の歴史の研究者たちは、このような説教活動の隆盛も、フリウリ語の発展に役に立ったと考えている。説教者たちや司牧のために巡回する教区の聖職者たちが、積極的にフリウリ語を用いた（しかも移動しながら）ことは、言語共同体としての一体性の意識を育み、言語の平均化・標準化にも貢献した、というのである²⁰⁾が、そのような貢献は過大評価はできないにしろ、ヨーロッパの伝統的な社会における教会の影響は、世俗化された社会では想像ができないほど大きいということも認める必要があるであろう。

5. 無関心あるいは証拠の不在？

以上、まとめると、(1) プロテスタント・カトリックどちらの側でも宗教改革は聖書のフリウリ語訳を生み出さなかった、(2) 聖書のフリウリ語訳は、宗教改革とは直接のつながり無しに、カトリック教会において、第二ヴァティカン公会議の流れから生まれた、(3) フリウリ語の発展にとって大きな役割を果たしたのは、聖書翻訳よりもむしろカテキスムであった、(4) そのカテキスムは、もともとルターの発案によるものだが、フリウリ語版のカテキスムを作成し広範囲に活用したのは、プロテスタントではなくて、カトリック教会であった、(5) 宗教改革の教会で説教などでフリウリ語が用いられたことを積極的に示す証拠は現存していないが、カトリック教会では説教をフリウリ語で行なうことが珍しくなく、多くのフリウリ語の説教が書き残されている、ということになる。

ルターのドイツ語に関する貢献と似たような出来事（事実、スロヴェニアにおけるトゥルーバルの活躍のケースはかなりそれに近く、彼は「カルニオラ（スロヴェニアの中央部地方の名称）のルター」と呼ばれている）を期待していると、いささか拍子抜けの結論になるかもしれない。ここでは聖書、カテキスム、説教のケースを取り上げたが、実は、それに限らず、フリウリ語で書かれた宗教改革の時代のプロテスタントの文書というのは、現在のところ、全くと言っていいほど知られていない。

ここには、プロテスタント側からのフリウリ語に関する積極的な関与はほとんど見えてこないが、どうしてであろうか。そのような文書は作られなかったのか、あるいはカトリックの宗教改革の動きの中で抹殺されてしまって跡を残さずに消えてしまったのか、あるいは単にまだ発見されていないだけなのか、簡単に断定はできないであろう。

スロヴェニアの場合も、トゥルーバルの業績は国の(再)カトリック化によって、省みられなくなるかに見えたが、19世紀後半から、民族意識の高揚にしたがって再び取り上げられるに至ったという経緯がある²¹⁾。そして現在、その業績は、(宗教的な教派の違いに関係なく)国民形成の契機となったものとして再評価されるに至っている。スロヴェニア共和国(およびさまざまなスロヴェニア関係団体)は、2008年に、国家的事業として、トゥルーバル生誕500周年の記念諸行事を行なった。

フリウリ史研究においても、調査・研究が進むにつれて、一部の研究者の見通しを覆す形で、盛んな宗教改革の姿が明らかになってきた、という経緯がある²²⁾。したがって、これから研究がさらに進めば、新たな事実が発見される²³⁾という可能性は全くは否定できないであろう。

他方、宗教改革運動がフリウリ語にあまり積極的に関与しなかったとしても不思議ではない、と思わせる、有力な状況証拠も存在する。それはその当時のイタリア半島地域と、フリウリの宗教改革運動になった人々の社会階層である。

先に、フリウリでは、宗教改革の運動は、都市部を中心に広まっていたとした。Francescato / Salimbeni (1977)は、この時代の都市の住民の中に、文化の担い手たり得るだけの経済的余裕のある中産階級の姿を見ている。この階級は、(フリウリにはおそらく遅れてやってきた)ルネッサンス以来の人文主義の文化を、ある程度ながら、取り入れることができた。それは、また、イタリア語の文化に参加することができた、ということをも意味する²⁴⁾。これは、そのような機会をほとんど持たなかったと推測される、農民の場合とは顕著な対照をなす²⁵⁾。

16世紀には、イタリア半島地域では、既にイタリア語(トスカーナ語)が読み書きができる人びとの間での共通語として通用しつつあった。イタリアの諸地方で、土着の言語が、共通語としてのトスカーナ語(イタリア語)の前に、「方言」という地位に追いやられていったが、それと同じ事がフリウリ語にも起こりつつあったと考えられる。1420年にヴェネツィア共和国の属国になって以来、フリウリのイタリア文化圏への帰属がますます強くなっていくことを考えればなおさらである。

つまり、フリウリで宗教改革を担ったのは、フリウリの外の世界と接触を持ち、フリウリ語以外の言語(少なくともその一つはイタリア語)を使うことも大きな困難なくできた人びとであった、ということである。そう考えると、もともとプロテスタントの宗教改革運動が聖書のフリウリ語訳もフリウリ語カテキスムも生み出さなかった、というのも、十分あり得る話である。

6. フリウリの混沌とした宗教的状況

さらなる研究を待たなければあまり確実なことは言えない点が多いとしても、どうやら確かなことが1つある。それは、プロテスタントの宗教改革は、カトリックの宗教改革を促す効果があったと言う点で、フリウリの文化に貢献した、ということである。

従来、フリウリはごく初期からキリスト教を受け入れ、基本的に、信仰に熱心なカトリック的教会が

ずっと続いてきた世界、と考えられていて、多くのフリウリ人は、そのような確固たるキリスト教の伝統を誇りとしてきた。古くはパスキーニ Pio PASCHINI (1878 - 1962) やより新しいものをあげると、メニス Gian Carlo MENIS のなどの歴史家が描く伝統的なフリウリ史は、まるで教会史そのものである。しかし、近年、調査が進むにつれて、フリウリの、そのようなカトリック的意味での模範的キリスト教世界という姿が、常にそうであったわけではないことがわかってきたのである。

実際には、宗教改革前後の時代のフリウリは、さまざまなグループのプロテスタントのような、ともかくもまだキリスト教の枠内の思想と言えるものに加えて、さまざまな宗教的・精神的な潮流が並存し混沌とした状況にあったことが、次第にわかってきている。カルロ・ギンツブルクの有名な研究によってよく知られるようになった、非キリスト教的な古い農耕儀礼の跡を残す「ベナンダンティ」や、独自の世界観を展開した異端者「メノッキオ」は、そのような例である。最近では、音楽研究プレッサッコ Gilberto PRESSACCO (1945 - 1997) が、教会の度重なる禁止にもかかわらず継続してきた「聖なる安息日」Sante sabide の信心を取り上げて議論となったが、これも、「非カトリック的な」風習としてここに挙げることができるかもしれない²⁶⁾。

また、教会の聖職者たちも、教会の権威や指導に従順ではなく、しばしば教会当局を「手こずらせた」(あまり良い表現ではないが)ことが知られている。例えば、17世紀初めには、トレント公会議後行われたアクイレア総司教区(フリウリにあるアクイレア総司教座が管轄する地域)の典礼の改訂に、多くの聖職者が従っていなかったことが知られている²⁷⁾。

プロテスタントの宗教改革運動、怪しげな異端思想、土着の異教的習俗、教会の権力に従わない聖職者たち。こうした要素を並べてみると、カトリック教会の公式の立場を代表する人々が感じた危機感を想像できるのではないだろうか。彼らの目には、フリウリでは、有象無象のあやしい教えや風習(社会学的・歴史的な分析から言えば、当然ながら、これらはそれぞれ固有の存在理由を持つ、別々の現象であることは言うまでもないが)がまかり通る中、キリスト教の正しい伝統は消滅の危機に瀕している、と見えたのであろう。こうした中で、フリウリの状況に対するカトリックの宗教改革によるこ入れは、正統派にとっては、復興と生き残りをかけた戦いであったのであろう。その中で、いかにして効果的に民衆教化を行うかという切実な問題に取り組むにあたって、フリウリ語の使用は、その重要な戦略の1つであったわけである。

この戦いは、周知のとおり、「伝統的にカトリック的なフリウリ」の像を定着させるに至る程度には成功を収めた(現在に至るまで、フリウリを含むイタリア北東部地域は、かつて「白いヴェネツィア三州」と呼ばれたように、伝統時にカトリック教会が強い地方である)。そして、その戦略における民衆教育が、フリウリ語の書き言葉の伝統を育むのに貢献した、というわけである。

7. 言語観についての発言

フリウリ語の歴史のこのような経緯は、あくまでも宗教的観点からの教化のために用いた策が、いわば、たまたま、結果としてフリウリ語の発展に役立ってしまった、と言うことに過ぎないのであろうか。それとも、このような態度は、言語政策としても、キリスト教の思想から導き出される当然の結論なのであろうか²⁸⁾。

この問いは、キリスト教が言語についてどのような考えを持っている（とキリスト教徒は考える）かを問うことになる。もっと具体的に、本稿の趣旨に沿って言い換えると、プロテスタントの宗教改革は、そして、カトリックの宗教改革は、言語について、特にフリウリ語についてどのような考え方を持っていたのか、という問いにつながる。さて、そのような点について、直接的に言及した発言は、記録に残っているであろうか。

スロヴェニアのトルーバルの場合、彼は、スロヴェニア語で著作活動をおこなうと同時に、スロヴェニア語について、そしてスロヴェニア語を使用することについての自分の考えを、文章に表わしている。たとえば、スロヴェニア語訳「マタイによる福音書」の「前書き」など（ツリベルク (2008)）。

ところが、同じころ、フリウリのプロテスタントの宗教改革者がフリウリ語の使用について発言した（少なくともキリスト教的な意味で）という記録は、現在のところ、知られていない。

それに対して、カトリック教会の側には、言語についての議論と知識の積み重ねの実績がある程度ある。というのも、教会におけるフリウリの公式の使用は、現在では認められるに至っているが、そこに至るまでにはさまざまな論争があったからである。その経過の中で、当然のことながら、フリウリ語の使用を推進することに好意的な意見の人々は、できるだけそのような主張に有利な論理と証拠を集めて提示しようとしてきた。

なかでも、教化・教育のためにその土地の言葉、住民の母語を積極的に用いるというのは、（少なくともアクイレイアの司教区では）昔からの教会の伝統である、との主張はたびたび繰り返されてきた。その根拠として引き合いに出される事実は、地方教会会議における「田舎の言葉」*lingua rustica* の使用を奨励する決定、スラヴ系住民に対して教会がスラヴ語で対応してきた事実、などである²⁹⁾。このような主張によれば、かつてのフリウリ語版カテキスムの広範囲な広まりも、第二ヴァティカン公会議以後の聖書翻訳への取り組みも、同じ伝統的な路線に位置づけられることになる。

もちろん、言語についての議論と知識の積み重ねる機会のあったカトリック教会の場合と、フリウリでは長くは続かず、しかもその痕跡が意図的に消し去られてきた可能性が高いプロテスタントの宗教改革の場合とを単純に比べるわけにはいかないことは言うまでもない。

また、これまでは、カトリック教会内でのフリウリ語に関する議論が、ともかくもフリウリ語の使用の証拠を見つけることや、そこから（良くも悪くも時代や歴史背景の枠を超えて）神学的な支えとなる結論を導き出すということ集中し過ぎた、という感がある。より客観的な議論のためには、個々の資料

や証言を、その見出された場に位置づけ直した上で、その文脈においてその資料がどういう意味を持っていたのか、そして、できるならば、それがどのような言語意識と結びついていたのか、をきちんと研究するべきであろう。

最後に

アドリア海北部沿岸地域の、フリウリ、スロヴェニア、ドイツ＝オーストリアなどを含む地域では、宗教改革の活動家たちは、国や地方の境を越えて頻繁な接触・交流を行いつつ、活動を繰り広げていた事は、もはやよく知られた事実である。しかも、フリウリとスロヴェニアを抱合する距離・面積は、世界地図の上ではそれほど目立つほど大きいわけではない。それにもかかわらず、宗教改革とそれに続く時代の経緯については、フリウリとスロヴェニアの間には、決して小さくない違いがあることを本稿では見た。

フリウリ（語）史の研究者たちは、1420年のヴェネツィア共和国への併合以来、フリウリはイタリア文化圏に組み込まれ、イタリアの他の地域との関係をますます深くしていったことを認めている。宗教改革期のフリウリにおいて、ある程度の経済的余裕があり、社会の中堅を構成した階級である都市の住民たちは、ルネッサンス以降のイタリアの言語文化の動きに巻き込まれていた（それが、宗教改革の、フリウリ語に対する無関心を説明するかもしれない可能性があることは、本文中で述べたとおりである）。そういう意味では、フリウリは、周辺の諸国と活発な活動を営んでいたにもかかわらず、たしかに「イタリア」の一部であったということになる。

本稿の冒頭でも触れたが、フリウリ語の共同体を1つの言語的マイノリティーと見なす見方が珍しくなくなっている。しかし、これをもって、イタリアの他の多くのローカルな言語現実（その大半は「イタリア系の」方言と呼ばれている）と比べてフリウリが際立って異なるということを意味するかのように（極端な場合には、イタリア人とは区別される「少数民族」であるかのよう）に考えることは、必ずしも事実を正確に理解する助けとはならないようである — もし、そのような考えがフリウリについてのまじめな言語史研究の成果を無視するような方向に向かうならば。

むしろ、独自の事情（例えば、ドイツ語圏やスロヴェニアとの密接な交流のような）に由来する固有性を保持し続けつつも、「イタリア」との切り離しがたい関係を生きてきた、それこそが、フリウリの姿なのではなからうか。今回宗教改革との関連で取り上げたケースは、それを示す事例の1つであるように見える。

注

- 1) 正確に言うと、フリウリの行政上の境界線は、時代によってさまざまな変更を蒙って来ており、現在の州の領域は、伝統的なフリウリ地方とは（ましてやフリウリ語域とは）一致しない。例えば、タリャメント Tagliamento 川下流の左岸域は、伝統的なフリウリ語の地域だが、オーストリア支配下のロンバルド＝ヴェネト王国の時代にヴェネツィア

県に併合されて現在に至っている。また、両世界大戦間の時期に、ゴリツィア県・ウディネ県の間で県境が幾分変更されて、トリエステ県に編入された地域もある。さらに、サッパーダ Sappada 地区（ドイツ語の方言が話されている）は、ベッルーノ県に所属しているが、教会法上はフリウリのウディネ大司教区に属する。また、次の注 [3] も参照のこと。

- 2) ここで言うゴリツィア地方は、イタリア共和国のゴリツィア県およびその周辺地域と、スロヴェニア共和国のゴリツィア地区 Goriška とを合わせたものとする。地理的に言うと、イゾンツォ Isonzo 川（スロヴェニア語ではソーチャ Soča 川）流域の、アドリア海に面する平野部からアルプス山間部の渓谷の地域に相当する。今では、国境によってイタリア側とスロヴェニア側の2つの区域に分断されているが、歴史上、中世から何世紀もの間、ゴリツィア伯領 Contea di Gorizia として、また、第一次世界大戦後の国境変更後から第二次世界大戦期までは、イタリア王国下のゴリツィア県として、そして教会法的な観点からは、ゴリツィアの司教の管轄する司教区として、ひとつの社会的・文化的まとまりをなしてきており、フリウリ人は、伝統的に、この地域をフリウリの一部と見做してきた。なお、フリウリ山間部の北東部を占めるカナール地区カナール渓谷 Valcanale（イタリア語） / Kanalska dolina（スロヴェニア語）は、現在ではウディネ県に属しているが、以前はゴリツィア地方に属していた。
- 3) イタリア語、ドイツ語、スロヴェニア語標準語、ヴェネツィア方言など、外から入ってきた言語のほか、フリウリで昔から話されている、スロヴェニア語のさまざまな方言、フリウリ土着のヴェネト系諸方言、バイエルン系ドイツ方言の言語島、などが挙げられる。
- 4) 約50万人ほど。国勢調査では、フリウリ語の言語能力に関する調査項目は設けられておらず、これは、ウディネ大学の最近の調査による数という（Vicario (2005), p.25）。ただ、周知の通り、複数言語使用の状態においては、どのような能力がどのくらい身についているか、その言語の話者と見なせるか、万人を納得させることのできる厳密な基準を定めることは困難である。また、フリウリ語の教育が公的な教育の中に地位を得たのは、20世紀も終わりになってであり、今でも必ずしも義務的ではないので、フリウリ語の学校教育を受けた人々の人数も、話者の数を知るのには、あまり参考にならないであろう。
- 5) 冗長な感じがするが、正確を期するために「プロテスタントの宗教改革」と「カトリックの宗教改革」という言い方をすることにする。「宗教改革」をもっぱらプロテスタントのもののみならず、それにカトリックの「対抗宗教改革」（ましてや「反宗教改革」）を対置するのは、誤解に導きやすい、問題のある見方であるということは、もはや定説となっている（百瀬 (2004) p. 131）。と言うのは、カトリック側の行なった事柄は、必ずしも、プロテスタント側のしたことの反対だったわけでも、また、プロテスタントに対抗するために案出されたわけでもないからである。両者の理念や施策は、いつも対立するものであったわけではなく、むしろ、お互いに並行した動きをとったり、相手から取り入れたりすることも、普通にあったと考えるべきであろう。本稿でも、（フリウリにおいて）宗教改革が目指したあるいは理想とした事柄が、結局、カトリック教会においても実現しているという事例を見て取れるであろう（一方が他方から学び取った方法を取り入れた、という場合もあれば、両者独立に、結局は似たようなことを行なうことになった、という場合もある）。
- 6) フリウリが古くからローマ帝国の一部であったこと、またとりわけ15世紀からこのかたヴェネツィア共和国領としてイタリアの社会・文化圏に属してきたことで、歴史記述・歴史認識の上でフリウリはイタリアの中に吸収されてしまい、フリウリ独自の問題は注目されにくかった。特に、言語の点に関しては、フリウリ語の問題は（近年の言語研究の成果を正当に評価してもなお）上層言語であるイタリア語の陰に隠れて、必ずしも十分な関心が払われてこなかったと言わざるを得ない。
- 7) ここでは、おおむね、現在のスロヴェニア共和国の範囲に入る諸地域を考えていただければ良いが、言語的・文化的な意味でのスロヴェニアの範囲は、正確に言えば、共和国の範囲とは一致しない。スロヴェニア語を話す地域は、国境を越えて、オーストリアとイタリアにも及んでいる。
- 8) 高津(2006) pp. 96-97 参照。
- 9) Paschini (1990) p. 807 や Francescato / Salimbeni (1977) pp. 142-143、また Ellero (1987) pp. 151, 152 など、フリウリ史の著名な研究者たちは、フリウリがドイツ・オーストリアとの交易にあつて重要な役割を果たしていたことから、ドイツ語圏からの影響に注目している。
- 10) たとえば、Ellero (1987) pp. 151, 152 を参照。
- 11) 彼の宗教改革とのかかわりは、若いころ、留学先でルターの教えに触れたことから始まっており、また、人生の後半、ドイツに亡命を余儀なくされてからは、ルーテル教会に帰属した。ただ、宗派ごとの教説の細かな違いにはあまり拘ら

ない人であったようである。宗教改革に好意的な方針を打ち出していたトリエステの司教ボノーモ Pietro BONOMO (1458 - 1546) の庇護・監督下のもとで過ごしていた時期には、彼の指導の下、カルヴィンの「キリスト教綱要」も学び、ボノーモとのつながりでトリエステに滞在したさまざまな傾向の改革者と交わりを持ったようである。なお、スロヴェニアの宗教改革とトゥルーバルの業績の概要については、尾田 / 山本 (2009)、金指 (2001) などを参照されたい。

- 12) 現在の標準スロヴェニア語で用いられているのは、1840年代に導入されたガイ正書法。また、教会スラヴ語風の語尾の導入は、スヴェテツ Luka SVETEC が、1852年に提唱したものと言う。金指 (2001), pp. 186, 187 を参照。
- 13) フリウリ語の聖書翻訳については、山本 (2003) でもう少し詳しく扱っているのでそちらを参照されたい。キリスト教の典礼の、また個人的に行われる祈祷のテキストの多くは、聖書から取られていて、ラテン諸典礼の地域では、そのような祈祷の多くは、(ラテン語のほか)に、宗教改革の時代以前のかなり早い時期から民衆の日常的な言語にも訳されて唱えられていたようである。したがって、そのようなテキストに、聖書の国語への翻訳の最初の萌芽をみることは不可能ではないが、これを、規模の上でも問題意識の上でも、宗教改革の時代の翻訳と比較できるかは、一概には決められないであろうから、本稿ではそれらは「聖書翻訳」の範疇からは除外した。
- 14) リュシアン・ボナバルトの出資による「マタイによる福音書」の訳、およびそれを修正・再版した自称「農民出版人」contadin stampador の版、さらに時代を下って第二次世界大戦後の、詩人 Meni Ucel (1908 - 1987) による福音書の翻訳、などのことである (これらのフリウリ語の聖書翻訳についても、山本 (2003) を参照されたい)。これらの翻訳は、教会の主導と言うよりは、個々の篤信家によって行われたものであるので、「カトリック教会によって」というよりこの方が適切な言い方であろう。
- 15) ただし、信徒の間に個人による聖書朗読という習慣が普及していないカトリック教会にあつては、フリウリ人に大きな影響を与えたのは、一冊にまとめられた書籍としての聖書ではなくて、典礼での朗読に用いられる「朗読聖書」lezionari である。つまり、フリウリ人にとって、長いこと、典礼中の聖書朗読が、聖書に触れる一番重要な機会であった。
- 16) 日本語訳では、カトリックでは「公教要理」、プロテスタントでは (宗派にもよるが)「教理問答」「教理問答集」などと呼ばれる。ここでは、既に定訳となっている書名など以外は、「カテキスム」とすることにする。
- 17) カトリック教会では、一問一答形式での教理教育は今では必ずしもポピュラーなものではなくなっているが、カテキスムという呼称およびその形式がカトリック教会にいかにも根強く残っているかが同える一例を挙げると、先のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の下で発行されたキリスト教教義の綱領・解説も、「カトリック教会のカテキスム」と題されている。
- 18) 自らアルマナックを編纂・出版して執筆活動を行ない一世を風靡した、詩人ツオルツェティ Pietro ZORUTTI (1792 - 1867) の諸作品に代表されるような民衆的な文学である。
- 19) カトリック教会における説教活動の隆盛については、木村 (2007) などを参照。
- 20) 例えば、Pellegrini (1987), pp. 220-221 参照。
- 21) 「[トゥルーバルの業績は] 忘れ去られ、反宗教改革によってスロヴェニアから痕跡を消し去られて、2世紀が過ぎるが、1800年代の末、リュブリャーナで、反カトリックの自由主義的な人びとたちによって、文化闘争の真っ只中に、かれの銅像が建てられた」(Hofer)
- 22) 「バスキーニの考えていたことに反して、[プロテスタントという] 異端は、フリウリ地方に、特に都市部を中心としてかなりの勢いで広まっていた (後略)…」(Francescato / Salimbeni (1977), p. 142)
- 23) もちろん、新しい発見と言うのは、未発見の資料が世に出る、と言う意味だけではない。もし、今まで、フリウリ史の研究者たちが、本稿が自ら課しているような問いを自問した事がないとしたら (筆者の見過ごしであれはよいのだが)、既に知られている資料をそのような視点で見直すことによってだけでも、興味深い「発見」が可能かもしれない。
- 24) Francescato / Salimbeni (1977), p. 144 を参照のこと。
- 25) Francescato / Salimbeni (1977), p. 147 を参照のこと。
- 26) プレッサッコは、音楽などをはじめとするフリウリの文化さまざまな場所に見出される証拠に基づいて、フリウリのキリスト教文化の古い層には、普通に考えられているカトリック的なものとは異なった、ユダヤ・キリスト教的な要素 (エジプトのアレクサンドリアに存在したことが知られている「テラペウタイ」と呼ばれる人々の共同体に由来するとプレッサッコは考えている) があることを主張し、その影響が後世にまで根強く残っていたことを、例えば、教会当局がなかなか根絶できなかった安息日について信心の中に見ようとしている。彼は、そこに、「中央」の教会権力の圧力とそれに対する土着の教会の抵抗、という繰り返される出来事の類型を認め、同じ問題を、トレント公会議後に行われた

- アクイレイア典礼の廃止の試みとそれに対する地元の聖職者たちの根強い反対の歴史にも見ているようである。
- 27) Vale (1933)、また、上記の注 26 も、参照のこと。
- 28) カトリックの民衆教化の事業にあたって、地方の土着の言葉であるフリウリ語の使用を促進するべきなのか、イタリア文化圏共通の言語であるイタリア語の普及を図るべきなのか、この問題について、フリウリの教会あるいはカトリック教会（特にヴァティカン）の関係者がどれほど深く考えていたかはわからない。ただ、先に述べたように、イタリアにおいて、対抗宗教改革の時代の教会の政策は、多くの場合、(イタリア全土の共通語としての) イタリア語の普及に貢献したという事実がある。したがって、教会の政策が、(共通語ではなく地方語である) フリウリ語の育成に役立ってしまったというのは、イタリアの教会全体のパノラマの中では、ともかくも、異例のことと言えるかも知れない。
- 29) ただ、教会におけるそのようなフリウリ語使用の伝統は 19 世紀まで続くが、現在に至るまで直接には繋がっていくとは必ずしも言いがたい。フリウリ語は、イタリア王国成立後、特にファシズムの時代にイタリア語に取って代わられる動きが強くなる。現在の教会におけるフリウリ語使用は、20 世紀、特にヴァティカン公会議後に再興あるいは新たに始められたものである。その際にも、フリウリ語の導入を望むフリウリの教会の聖職者有志たちの考えは、イタリア語の使用で十分だという意見と衝突せずすんなり通ったわけではなかった。

参考文献

(1) 書籍・印刷物

- AAVV, 1998, *Bibbia popoli e lingue*. Prolusione del Card. Paul Poupard, 1a edizione, PIEMME.
- AAVV., 1971-1983. *Enciclopedia monografica del Friuli Venezia Giulia*, vol 2. *vita e economia* (parte prima & parte seconda), vol 3. *la storia e la cultura* (parte prima, parte seconda, parte terza), Udine, Istituto per l'Enciclopedia del Friuli-Venezia Giulia.
- AAVV., 2008. *2008 Trubarjevo leto = The Year of Trubar = das Trubarjahr: Primož Trubar (1508-1586), 500 obletnica rojstva, 500 th Anniversary of the Birth, 500. Jahrestag seiner Geburt*. Ljubljana, Koordinacijski odbor za državne proslave.
- ADAM, Adolf, 1990, *Corso di liturgia*, seconda edizione, Brescia, Queriniana.
- BANFI, Emanuele / BONFADINI, Giovanni / CORDIN, Patrizia / ILIESCU, Maria, 1995, a cura di, Italia settentrionale: crocevia di idiomi romanzi. Atti del convegno internazionale di studi, Trento, 21-23 ottobre 1993, Tübingen, Max Niemeyer Verlag.
- BIAGETTI, Stefania, 2007. *Il mito della "Riforma italiana" nella storiografia dal XVI al XIX secolo*, Milano, Franco Angeli s.r.l.
- BIANCONI, Sandro, 1995, *il ruolo della Chiesa borromaica nel processo di diffusione dell'Italiano nella Lombardia alpina e prealpina tra '500 e '600*, in BANFI, Emanuele / BONFADINI, Giovanni / CORDIN, Patrizia / ILIESCU, Maria, a cura di, *Italia settentrionale: crocevia di idiomi romanzi*. Atti del convegno internazionale di studi, Trento, 21-23 ottobre 1993, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, pp.323-334.
- DI BRAZZANO, Stefano, 2005, *Pietro Bonomo (1458-1546), diplomatico, umanista e vescovo di Trieste. La vita e l'opera letteraria* (Hesperides. Lingue e letterature occidentali. Serie Gold 2 - Centro studi storico-religiosi del Friuli Venezia Giulia 39/41), Trieste, Edizioni Parnaso.
- CAPONETTO, Salvatore, 1997. *La Riforma protestante nell'Italia del Cinquecento*, seconda edizione riveduta e aggiornata, Torino, Claudiana.
- DOLINAR, France M., 2000, *L'influsso di Pier Paolo Vergerio sul protestantesimo sloveno*, in ROZZO 2000, pp. 97-105.
- ELLERO, Gianfranco, 1987, *Storia dei friulani*, Udine, Arti Grafiche Friulane.
- FAGGIN, Giorgio, 1979, *Letteratura ladina in Friuli*, in *Enciclopedia monografica del Friuli-Venezia Giulia* cit., pp.1243-1264
- FRANCESCATO, Giuseppe / SALIMBENI, Fulvio, 1977, *Storia, lingua e società in Friuli*, seconda edizione, Udine, Casamassima.
- GINZBURG, Carlo, 2002, *I benandanti : stregoneria e culti agrari tra cinquecento e seicento*, Piccola Biblioteca Einaudi, 4a ristampa, Torino, Giulio Einaudi (日本語訳: カルロ・ギンズブルグ「ベナンダンティ: 16-17 世紀における悪魔崇拝と農耕儀礼」竹山博英訳 東京: せりか書房 1986 年)。
- GINZBURG, Carlo, 1999, *Il formaggio e i vermi: il cosmo di un mugnaio del '500*, Biblioteca Einaudi, Torino, Giulio Einaudi (日本語訳: カルロ・ギンズブルグ「チーズとうじ虫: 16 世紀の一粉挽屋の世界像」杉山光信訳 東京: みすず書房, 1984 年)。
- KOS, Janko, 1992, *Pregled slovenskega slovstva*, Ljubljana, Državna založba Slovenije.
- LOSERI RUARO, Laura, 1998. *Atmosfera di Trieste*, Trieste, Gruppo Stampa Editoriale Sergio Schiberna editore.
- MANIACCO, Tito, 1985, *Storia del Friuli*, Newton Compton editori, Roma.

- MARCHETTI, Giuseppe, 1952, *Lineamenti di grammatica friulana*, Udine, Società Filologica Friulana.
- MENIS, Gian Carlo, 1974, *Storia del Friuli : dalle origini alla caduta dello stato patriarcale (1420)*, 2a edizione con un'appendice "Dalla fine del Medioevo a oggi", Udine, Società Filologica Friulana.
- MERIGGI, Bruno, 1970, *Le letterature della Jugoslavia*, Firenze, Sansoni editore.
- MORETTI, Aldo, 1985, *La grafia della lingua friulana*, Udine, Ribis.
- NAZZI, Zuan, 1977, *Il catechism furlan. Cens des edizions dal 1700 e dal 1800*, Clape cultural Aquilee, Friùl.
- PASCHINI, Pio, 1990, *Storia del Friuli*, 4a edizione a cura di Giuseppe Fornasir, Udine, Arti Grafiche Friulane.
- PELLEGRINI, Rienzo, 1987, *Tra lingua e letteratura. Per una storia degli usi scritti del friulano*, Udine, Casamassima.
- PIERCE, Robert A., 2000, *Pier Paolo Vergerio the propagandist*, Roma, Edizioni di Storia e Letteratura.
- PRESSACCO, Gilberto / Raffaella, PALUZZANO, 1998, *Viaggio nella notte della Chiesa di Aquileia*, Udine, Gaspari editore.
- RONCHI, Sergio, 2008, *Huldrych Zwingli, il riformatore di Zurigo*, Torino, Claudiana.
- ROZZO, Ugo, 2000, a cura di, *Pieri Paolo Vergerio il Giovane, un polemista attraverso l'Europa del Cinquecento*. Convegno internazionale di studi, Cividale del Friuli, 15-16 ottobre 1998, Udine, Forum.
- STRANJ, Pavel, 1989, *La comunità sommersa. Gli sloveni in Italia dalla A alla Ž*, Trieste, EST-ZIT.
- TOMIZZA, Fulvio, 1984, *Il male viene dal Nord. Il romanzo del vescovo Vergerio*, Milano, Arnoldo Mondadori editore.
- VALE, Giuseppe, *La liturgia nella chiesa patriarcale di Aquileia*, in *La basilica di Aquileia*, a cura del comitato per le cerimonie celebrative del IXo centenario della basilica e del 1o decennale dei militi ignoti, Bologna, Nicola Zanichelli editore, 1933, pp.367-381.
- VICARIO, Federico, 2005, *Lezioni di linguistica Friulana*, Udine, Forum.
- VELLUTO, Sergio, 2008, *Valdesi d'Italia. Onesti, discreti, un po' scorbutici*. Seconda Edizioni, Casale Monferrato (AI), Edizioni Sonda.
- WELTI, Manfredi, 1999, *Breve storia della riforma italiana*, Traduzione di Armido Rizzi, Ristampa [1a edizione 1985], Genova, Casa editrice Marietti.
- 尾田泰彦 / 山本真司 2009年「トゥルーバルと聖書翻訳」 Dobovšek-Sethna, Jelisava / 山本真司 編「プリモシュ・トゥルーバルの生誕 500周年およびスロヴェニアのEU議長国記念 スロヴェニア言語・文化シンポジウム」日本スロヴェニア研究会 pp. 4-15
- 甚野尚志 1996年『中世の異端者たち』世界史リブレット20 山川出版
- 金指久美子 2001年『スロヴェニア語入門』大学書林
- 木村容子 2007年「15世紀イタリアの遍歴説教：都市による説教依頼・交渉・融通」、「イタリア学会誌」(57), pp. 239-264
- 小泉徹 1996年『宗教改革とその時代』世界史リブレット27 山川出版
- ジョルジュ カステラン / アントニア ベルナル 2000年『スロヴェニア』千田善訳 文庫クセジュ 82 白水社
- 柴直弘 2006年『図説バルカンの歴史』改訂新版 河出書房新社
- 高津美和 2006年「説教師ベルナルディーノ・オキーノの亡命 — カトリック改革と宗教改革のはざままで —」『イタリア学会誌』(56) pp. 96-97
- 竹森尚一 / 土屋吉正 / 高橋保行 / 徳善義和 / 吉岡繁 1981年『シンポジウム 礼拝論』東神大パンフレット20
- 土屋吉正 1985年『典礼の刷新 — 教会とともに20年』オリエンズ宗教研究所
- ティンカ・デラコルダ 2009年「スロヴェニア人『カクレ』プロテスタント — 日本のカクレキリシタンとの比較 —」 Dobovšek-Sethna, Jelisava / 山本真司 編 前掲書 pp. 29-36
- 南山大学監修 1986年『第2バチカン公会議公文書集』中央出版社
- 野田又夫 1963年『ルネッサンスの思想家たち』岩波新書 青-498
- 半田元夫 / 今野國雄 1977年『キリスト教史 I』山川出版社
- 半田元夫 / 今野國雄 1977年『キリスト教史 II』山川出版社
- 百瀬文晃 2004年『キリスト教の本質と展開 キリスト教概説2』教友社
- 百瀬文晃 2004年『キリスト教の原点 キリスト教概説1』教友社
- 山本真司 2009年「ピエトロ・ボノーモについて」 Dobovšek-Sethna, Jelisava / 山本真司 編 前掲書 pp. 16-28
- 山本真司 2003年「聖書のフリウリ語訳について」東京外国語大学語学研究所論集 第8号 pp. 45-65
- ルカ・ツリベルク 2009年「国民的言語としてのスロヴェニア語と日本語の成立」 Dobovšek-Sethna, Jelisava / 山本真司 編 前掲書 pp. 37-47

(2) ウェブサイト

- "Attraverso la storia" (<http://www.unafinestrasutrieste.it/storia01.htm>, <http://www.unafinestrasutrieste.it/storia02.htm>)
in "Una finestra su Trieste" (<http://www.unafinestrasutrieste.it/index.html>)
- CEFEREIN, Alexandra, "Introduction to Slovene Language"
(http://www.thezaurus.com/?/language/Slovenian_language_the_introduction/) in "Thezaurus: Slovenian Cultural Archives" (<http://www.thezaurus.com/>)
- CEFEREIN, Alexandra, "Primus Trubar reformer" (http://www.thezaurus.com/webzine/primoz_trubar_reformer/) in
"Thezaurus: Slovenian Cultural Archives" (<http://www.thezaurus.com/>)
- Di BRAZZANO, Stefano, "Pietro Bonomo" (http://it.wikipedia.org/wiki/Pietro_Bonomo)
- HOFER, Gianfranco, "Linee del pensiero teologico di Primoz Trubar" (<http://www.icn-news.com/?do=new&id=3031> in ICN
News.com (<http://www.icn-news.com/>) [現在では、"Conscientia et Fide"
(http://conscientia_et_fide.blog.tiscali.it/2008/03/25/linee_del_pensiero_teologico_di_primoz_trubar_1874496-shtml/)
にて閲覧可能]
- "Il Protestantesimo" (<http://www.regionevfg.com/storiafriuli/28protest/protestantesimo.htm>) in "La Storia: i luoghi, i fatti, le
genti nel Friuli Venezia Giulia" (<http://www.regionevfg.com/storiafriuli/>)
- "Jubilejna izdaja Svetega pisma ob Trubarjevem letu" (<http://www.drustvo-svds.si/prodaja/katalog/trubar.htm>) in
"Svetopisemska družba Slovenije" (<http://www.drustvo-svds.si/>)
- "La storia triestina" (<http://www.tergeste.eu/index.php/component/content/article/65>) in "Il portale di Trieste"
(<http://www.tergeste.org/index.htm>)
- "Pier Paolo Vergerio, il giovane - Istriani Illustri" (<http://www.istriani.com/istria/illustri/vergerio/index-younger-ita.htm>)
- "Pier Paolo Vergerio (1498-1565) Da vescovo cattolico a pastore protestante per la libertà"
(<http://www.riforma.net/storia/vergerio/davescovoapastoreprotestante.htm>)
- "Pietro Bonomo" (http://it.wikipedia.org/wiki/Pietro_Bonomo)
- "Storia" (<http://www.cappellacivica-trieste.it/storia.htm>) in "Cappella civica di Trieste" (<http://www.cappellacivica-trieste.it/>)
- "Storia della Diocesi di Trieste" (<http://www.istrianiet.org/istria/religion/history/trieste-diocesi-storia.htm>)
- "STORIA DELLA DIOCESI DI TRIESTE" (http://www.webdiocesi.chiesacattolica.it/cgi_new/vis_diocesi.jsp?idDiocesi=210)
in "DIOCESI DI TRIESTE" (http://www.webdiocesi.chiesacattolica.it/cgi_new/vis_diocesi.jsp?idDiocesi=210)
- "Vergerio, Pier Paolo, vescovo di Capodistria (1498-1565)" (<http://www.eresie.it/it/id651.htm>) in "Dizionario del pensiero
cristiano alternativo" (<http://www.eresie.it/>)

Gli influssi della riforma protestante e della riforma cattolica sulla storia della lingua friulana

YAMAMOTO Shinji

Il punto di vista che riconosce in Friuli una comunità con la propria tradizione linguistica condurrebbe a domandare se la riforma protestante abbia esercitato qualche influsso sulla storia della lingua friulana, come, per es., nel caso del tedesco con la traduzione biblica del Lutero.

In realtà, mentre nella vicina Slovenia la riforma protestante, che ebbe il suo massimo esponente nella figura di Primož Trubar, utilizzava la lingua slovena nella traduzione della bibbia, nel catechismo, nella predica, etc., nel Friuli dello stesso periodo non si trova quasi nessuna testimonianza (anzi, non ci si domanda neanche se ce ne sia effettivamente) a riguardo dell'utilizzo del friulano nell'ambito del protestantesimo.

Sarà infatti solo nel periodo dopo la riforma cattolica che si comincia a vedere numerose testimonianze dell'uso del friulano nell'ambito ecclesiale, cattolico evidentemente, quali libretti del catechismo, le prediche etc., che avrebbero abituato il popolo all'uso scritto della lingua friulana, preparandolo così alla fioritura della letteratura popolare, di almanacchi e di lunari, nell'Ottocento.

Che cosa è successo? Non è esclusa la possibilità che semplicemente le documentazioni dei protestanti siano andate perdute o distrutte nel periodo successivo. Ma è altrettanto probabile che in Friuli gli aderenti al protestantesimo composti maggiormente da borghesi e nobili, godendo di una condizione economica alquanto migliore rispetto ai contadini, potessero partecipare alla cultura del Rinascimento e all'uso della lingua toscana, e non fossero quindi particolarmente interessati di ricorrere al friulano.